

## 顕彰状

能楽小鼓方大倉流の人間国宝、北村治氏は、1936年、東京に生まれた。幼少より、名人と謳われた巖父北村一郎の薫陶を受け、十一歳の1947年に初舞台を勤めてより、日々研鑽怠りなく、繊細で深みのある芸境を確立した、現代屈指の雛子方である。

1955年に私立暁星学園を卒業して、かねて憧れていた早稲田大学第一文学部文学科仏文学専修に入学、新庄嘉章教授をはじめとする碩学の下で、フランス近代小説の世界に学んだ。その素養は現在に至るまで氏の教養の骨格となり、能楽界屈指の読書家・教養人として尊敬を集めている。

その一方で後に人間国宝となる宮<sup>みや</sup>蘭<sup>の</sup>千<sup>せん</sup>之<sup>し</sup>の門下となって宮<sup>みや</sup>蘭<sup>の</sup>節<sup>しん</sup>に<sup>しつ</sup>親<sup>しん</sup>炙<sup>しつ</sup>するなど、多趣味な一面も備える。この間も本来の芸道修練に精進を重ね、仏文学専修三年生の1957年には大曲「道成寺」を初演、小鼓役者として自立した。

卒業後は着実に歩みを進めて若手小鼓役者の随一と目され、観<sup>かん</sup>世<sup>ぜ</sup>寿<sup>ひ</sup>夫<sup>さお</sup>ほか数々のすぐれたシテ方役者の舞台にしばしば共演したが、安定したリズム感と深みのある音色は、巖父一郎をもしのぐほどであった。1973年に父に死別、二年後の1975年には日本能楽会会員に推され、古典の名曲ばかりでなく、新作能や現代演劇との共演など、幅広い活躍を見せた。80年代以降は、能の秘曲上演のほとんどの小鼓役を一人で勤めるなど、斯道の重鎮として不動の地位を築いた。

北村氏の鼓は、決して派手やかな大音ではないにも関わらず、いわゆる遠<sup>と</sup>音<sup>おね</sup>の利いた深く澄んだ音色を身上としており、また簡にして要を得た間合いの取り方も絶妙で、現代の能楽雛子の魅力を代表する芸と称される。観<sup>かん</sup>世<sup>ぜ</sup>寿<sup>ひ</sup>夫<sup>さお</sup>記念法政大学能楽賞を受賞、人間国宝として斯道を代表する名人であり、氏の鼓を聞くために能楽堂を訪れるファンも少なくなかった。惜しまれつつ職業病ともいべき腕の故障により、昨年潔く舞台を引かれた。本学卒業の芸術家の鏡ともいべきその業績を称え、早稲田大学は校友北村治氏を早稲田大学芸術功労者として、ここに永くその栄誉を顕彰するものである。

2010年3月25日

早稲田大学